

341 胎児共存奇胎の臨床的取扱い

千葉大産婦人科

松井英雄、飯塚美徳、長田久夫、関克義、
関谷宗英

〔目的〕胎児共存奇胎とは正常胎児と奇胎を合併する稀な疾患であるが、超音波断層法の進歩に伴い娩出前に診断されることが多い。一方部分奇胎でも胎児を認めることがあり、両者の鑑別には遺伝学的検討が必要である。今回臨床的、遺伝学的に胎児共存奇胎とされた症例の取り扱いについて検討した。

〔対象・方法〕1981年より1996年までに当科で直接管理した982例の胞状奇胎（全奇胎765例、部分奇胎217例）を対象とした。遺伝学的に部分奇胎の多くは3倍体であり、胎児はfirst trimesterで胎内死亡する 경우가多く、妊娠12週以降で胎児心拍が確認された11症例を臨床的に胎児共存奇胎と診断した。

〔成績〕11例中8例は妊娠12週から24週までの間に妊娠を中絶（胎内死亡1例含）、3例は妊娠を継続した。続発率は4例（36.4%）と高率であり、妊娠継続例より2例の続発を認めている。遺伝学的検索は妊娠継続3例を含め6例で行われ、全例二卵性双胎（全奇胎と正常胎児）と診断されている。妊娠継続を行った3例中1例は重症妊娠中毒症を併発し、妊娠23週で緊急帝王切開となり、他の2例は38週、40週で分娩に至った。妊娠経過中血中hCG（human chorionic gonadotropin）が順調に下降し、超音波にて奇胎部分が不明瞭となった症例では続発を起こさなかった。

〔結論〕胎児共存奇胎は稀な疾患であり、妊娠継続の是非については議論の分かれるところである。今回の検討では羊水穿刺などにより正常核型の胎児を確認した症例では、hCGの推移、超音波断層法による奇胎部分の観察が管理に有用であると示唆された。

342 癌悪液質に伴う体重減少の成因に関する研究—筋細胞アポトーシス—

大阪市大、十三市民病院*、阪和住吉総合病院**

角 俊幸、西村貞子、本田謙一、平井光三、
出口昌昭、安井智代、中田真一*、辰田一郎**、
石河 修、荻田幸雄

〔目的〕癌の進行に伴い発生する体重減少の原因については、従来栄養障害や代謝異常にその原因を求められてきたが未解決となっている。今回、担癌個体の筋細胞におけるアポトーシスに着目し、体重減少の成因を家兎悪液質モデルを用いて検討したので報告する。〔方法〕1) 体重約3kgの家兎を3群に分け、1群には大腿筋にVX2腫瘍細胞を移植し癌悪液質モデルを作成し担癌群とし、他は健常群、飢餓群（食餌量が健常群の1/3）とした。2) 各群で、経日的に体重、食餌摂取量を測定した。3) 移植後10日目毎に各群の大腿筋組織を採取し、TUNEL法にてアポトーシスの検出を試み、Apoptotic Index（200倍視野中のTUNEL法陽性細胞の割合、以下A.I.）で評価し、さらに4) 透過型電顕による観察をおこなった。〔成績〕1) 体重は、担癌群で移植後40日目より有意に減少し、健常群では $107.5 \pm 1.0\%$ と増加しているのに対して、担癌群では $88.5 \pm 2.9\%$ 、飢餓群では $78.6 \pm 1.6\%$ と有意に減少していた。2) 各群のA.I.を比較すると、健常及び飢餓群ではほとんど0であったのに対し、担癌群では10日目 $9.26 \pm 1.24\%$ 、20日目 $65.6 \pm 4.61\%$ 、30日目 $42.4 \pm 3.69\%$ 、40日目 $3.40 \pm 0.55\%$ と有意に高値を示した。3) 透過型電子顕微鏡像における検討では、移植後20日目でアポトーシスに特徴的な像を認めたが、10日目、30日目、40日目ではこれらの変化は認められなかった。〔結論〕担癌個体における正常筋組織細胞のアポトーシスは体重減少にさきだち認められ、あたかもその後惹起する著しい体重減少の引き金の如き病態を呈した。